蘇軾詩注解（二十三）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原田直枝
西岡淳
（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

程徳林が真州に赴くを送る（一八九四）

谷林堂（一八九六）

予　少年なりしとき、頗る松を種うるを知る、手づから数万株を植え、皆な梁柱に中れり、都梁山中に杜輿秀才を見るに、其の法を学ぶを求む、戯れに二首を贈る（一八九八・一八九九）

一

行きて宿・泗の間に徐州の張天驥に見えて、旧韻に次ぐ（一九〇〇）
劉景文が傅羲秀才に贈るに次韻す（一九〇一）
彭城に在りし日、定国と九日黄楼の会を為す。今復た是の日を以て宋に相遇う。凡そ十五年、憂楽出処、勝げて言う可からざる者有り。而して定国は道を学びて得ること有り。百念　灰のごとく冷めて顔益ます壮なり。顧みるに予は衰病して心形倶に瘁れたり。之に感じて詩を作る（一九〇二）
九日、定国が韻に次ぐ（一九〇三）
召し還されて都門に至りて、先ず子由に寄す（一九〇四）
定国が寄せらるるに次韻す（一九〇五）

一八九四（施三二―二二）

送程徳林赴眞州
程徳林が真州に赴くを送る

1 君爲縣令元豐中　　君　県令と為る　元豐中
2 吏貪功利以病農　　吏　功利を貪りて以て農を病ましむ
3 君欲言之路無從　　君　之を言わんと欲すれども　路　従る無し
4 移書諫臣以自通*　　書を諫臣に移して以て自ら通ず
5 元豐天子爲改容　　元豐の天子　為に容を改む
6 我時匹馬江西東　　我れ時に　匹馬　江の西東
7 問之逆旅言頗同　　之を逆旅に問えば　言　頗る同じ
8 老人愛君如劉寵　　老人　君を愛すること劉寵の如く

9　小兒敬君如魯恭　　小児　君を敬すること魯恭の如し
10　爾來明目達四聰　　爾来　目を明らかにし　四聡を達す
11　收拾駔駿冀北空　　駔駿を収拾して冀北空し
12　君爲赤令有古風　　君　赤令と為りて古風有り
13　政聲直入明光宮　　政声　直ちに明光宮に入る
14　天廄如海養羣龍　　天廄　海の如くして群龍を養う
15　并收其子豈不公　　并びに其の子を収む　豈に公ならずや
16　白沙何必煩此翁　　白沙　何ぞ必ずしも此の翁を煩わさん

〔原注〕諫臣蹇授之也（諫臣は、蹇授之なり）
〔＊＊〕君之子祁擧制策文學行義爲時所稱（君の子の祁、制策に挙げらる。文学・行義　時の称する所と為る）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。知揚州として揚州にあった。
○程徳林　程筠のこと。徳林はその字。浮梁（江西省）の人。蘇軾と同じく嘉祐二年の進士で、知陳留（県）、戸部郎中、知真州などを歴任した。真州は江蘇省にある。蘇軾に「同年の程筠徳林　先墳の二詩を求む」詩（『合注』巻二三）がある。なお、この詩の韻は上平一東と上平二冬の通押で、毎句に押韻する（8句の寵の字のみ上声二腫の韻だが、地名として用いる上平一東の音もある。上声で読む場合も、古体詩の押韻としては他の韻字と同類の東部に属する。王力『漢語詩律学』「古体詩的押韻」を参照）。
1○君為一句　程筠が元豊年間（一〇七八―八五）に、どの地の県令を務めたのかは、現存する伝記資料の類（明・

程敏政輯『新安文献志』など）からは確認できない。清・何治基等撰『安徽通志』巻一一五には、婺源県の令として程筠の名が見えるが、時期を記さない。2○功利　功績と利益。『荘子』天地篇に、「功利機巧は、必ず夫の人の心に忘し」とある。「子由の「蔣夔が代州の学官に赴くを送る」に次韻す」の注（『蘇東坡詩集』第四冊二二四頁）を参照。34○君欲・移書二句　移書は、文書を回す、手紙を出すこと。『韓非子』存韓篇に、「二国の事畢わらば、則ち韓　以て書を移して定む可きなり」とある。諫臣は、君主を諫める臣下のことで、原注によれば蹇序辰のこと。原注の注を参照。孔凡礼は、詩題の注に挙げた元豊七年の作「同年の程筠徳林　先墳の二詩を求む」詩に関して、程筠が諫臣の蹇昌言に新法の弊を文書で訴え、その内容を聞いた神宗が顔つきを改めたとする、『（乾隆）浮梁県志』（巻八）の記事を引く（『蘇軾年譜』中冊六三〇頁）。5○元豊天子　神宗のこと。1句、34句の注を参照。○改容　顔つきや態度を改め正すこと。『荘子』徳充符篇に、「子産　蹙然として容を改め貌を更む」とある。6○匹馬　一頭の馬。役人としての旅ではなく、供の者を引き連れずに一人で、という意味を込める。なお、蘇軾の黄州流謫は、元豊二年から七年にかけてである。7○逆旅　やどや。旅館。『春秋左氏伝』僖公二年に、「今、虢　不道を為し、逆旅を保ちて、以て弊邑の南鄙を侵す」とあり、杜注に「逆旅は、客舎なり」とある。8○老人一句　後漢の劉寵は仁政を施したため、任地の民によく慕われた。会稽（浙江省）の太守の任を終えて去ろうとしたとき、数名の白髪の老人が若耶山から現れ、劉寵に向かって、他の太守の在任中には、山中に住む者も徴発などで政府に常に脅かされたが、劉寵が着任してからは日々平安に暮らすことができた、と言って謝した（『後漢書』劉寵伝）。9○小児一句　後漢の魯恭は中牟（河南省）の令となったとき、徳による教化を重んじて吏民の信頼を得た。ある時その地域一帯が螟（稲の害虫）の被害を受けたが、中牟にはその害が及ばなかった。河南尹の袁安はこれを不思議に思い、部下の肥親を遣って調べさせた。すると中牟の子供が近くに雉が来たのに捕まえようとしないので、なぜかと問うと、「雉が雛を連れているから」と答えた。肥親は魯恭に「来たる所以の者は、君の政跡を察せんと欲する耳。今、虫は境を犯さず、此れ一の異なり。化は鳥獣に及ぶ、此れ二の異なり。竪子に仁心有り、此れ三の異なり。久しく留まれば、徒らに賢者を擾わす耳」と言って別れ、還って袁安にそのことを報告した（『後漢書』魯恭伝）。10○爾来一句　『尚書』舜典に、「四岳に詢り、

四門を闢き、四目を明らかにし、四聡を達す」とある。聡は、耳がよく聞こえること。11〇駔駿　駿馬。また、馬の勢いがあるさま。左思「魏都の賦」（『文選』巻六）に、「燕弧　庫に盈ちて委勁にして、冀馬　廐に塡ちて駔駿なり」とある。〇冀北空　冀は、冀州のことで、今の河北省および山西省を含む一帯をいう。その北部は古くより名馬を産するとされた。『春秋左氏伝』昭公四年に、「冀の北土は、馬の生ずる所」とある。また、馬の鑑定の名人と伝えられる伯楽に言及した、韓愈「温処士が河陽軍に赴くを送る序」（『韓昌黎集』巻二一）に、「伯楽一たび冀北の野を過ぎて、馬群遂に空し」とある。12〇赤令　赤県の令。唐代の制度では、県を赤、畿、望、緊、上、中、下の七等級に分かち、宋代も基本的にこれを踏襲した。このうち京師の治下に置かれたのが赤県で、例えば東京開封の治下では開封県と祥符県、西京洛陽の治下では河南県と永安県がこれに当たる（『元豊九域志』巻一）。程筠がこれらの地の県令に任じられたという記録は存しないが、前掲『新安文献志』（巻八〇）などには、陳留県の知県（唐代の県令に相当）となった記事が見える。ここでは或いはそのことを言うのかもしれない（但し陳留県は赤県ではなく畿県。唐代では望県）。13〇政声　政治を行う者としての声誉。『後漢書』杜根伝に、「位　巴郡太守に至り、政　甚だ声有り」とある。〇明光宮　漢の宮殿の名。借りて宋の天子の宮殿をさす。「広陵にして三同舎に会す……　劉莘老」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一五九頁）を参照。14〇天廏　天子の馬を飼ううまや。杜甫「沙苑行」に、「王　虎臣有りて苑門を司る、門に入れば天廏に皆な雲のごとく屯る」とある。〇群龍　龍は、駿馬をいう。『周礼』夏官「廋人」に、「馬は、八尺以上を龍と為し、七尺以上を騋と為し、六尺以上を馬と為す」とある。15〇其子　程筠の子、程祁のこと。原注〔＊＊〕の注を参照。16〇白沙　真州をさす。唐代の揚子県白沙鎮の地に、宋代になって建安軍が置かれ、次いで真州と改められた。『大清一統志』（巻九六）揚州府儀徴県の条を参照。〇此翁　程筠をさす。一韓智翊は、「徳林ヲバ朝廷ニ用イズシテ、今真州ヘヤラルルゾ。惜（シ）ム可（キ）事ゾ。白沙ハ真州ゾ。此翁ハ徳林ヲ云（フ）ゾ」（『四河入海』巻二二の二）と記す。〇原注　蹇授之は、蹇序辰のこと。授之はその字。双流（四川省）の人。父の蹇周輔は范鎮と交わりがあった。進士に挙げられた後、監察御史、殿中侍御史、右司諫などを歴任し、戸部侍郎、翰林学士に至った。『宋史』巻三二九に伝がある。ここでは、蹇序臣が右司諫の任に在った時のことを言うと思われる。〇〔＊＊〕祁は、程

五

筠の子の程祁のこと。字は宗彦。進士に挙げられ、知吉州、都官員外郎などを歴任した（『宋詩紀事補遺』巻三四）。制策は、科挙で天子からの出題（策）に対して見解を書いて回答することをいう。策は、元来は木の札の意。文学（文章に作るテキストがある）は、学問。行義は、行いに道義性があること。『荘子』天地篇に、「桀・跖と曾・史と、行義は問有り」とある。

あなたが県令となった元豊のころ、役人たちは手柄と利益をむさぼって農民を苦しめていた。上申しようにもその道は閉ざされていたから、あなたは諫臣に文書を届けて意見を伝えた。かくして元豊の天子はいずまいを正されたのだった。

ときに私はひとり馬にまたがって、長江の辺りを西へ東へ旅をしていた。その途中、宿屋であなたのうわさを尋ねれば、皆がこう答えるのだった。「老人たちは劉寵に対するように敬愛し、また子供たちは魯恭に対するように尊敬しています」、と。

その頃からは天子の耳目が四方に広く明らかに達し、駿馬の如きすぐれた人材をごっそり登用なさるようになって、（名馬を産する）冀北の地はいまや空っぽになってしまった。赤県の令たるあなたは、いにしえぶりを以て任地を治められたため、その施政の声誉がまたたくまに宮中にとどき、かくして朝廷は龍の如き逸材の宝庫となった。ご令息がそこに召されるのはもとより正しいことだが、この老成の士が（朝廷に用いられずに）、これから白沙鎮くだりに赴かれるとは惜しいことだ。

一八九六（施三二―一三）

谷林堂

谷林堂

1 深谷下窈窕　深谷　窈窕を下る
2 高林合扶疏　高林　合して扶疏たり
3 美哉新堂成　美なる哉　新堂成りて
4 及此秋風初　此の秋風の初めに及ぶ
5 我來適過雨　我れ来たりて適に過雨
6 物至如娛予　物の至りて予を娛しましむるが如し
7 穉竹眞可人　稚竹　真に人に可なり
8 霜節已專車　霜節　已に車を専らにす
9 老槐苦無賴　老槐　苦だ無賴
10 風花欲塡渠　風花　渠に塡たんと欲す
11 山鴉爭呼號　山鴉　争って呼号し
12 溪蟬獨清虛　渓蟬　独り清虚なり
13 寄懷勞生外　懐いを労生の外に寄せ
14 得句幽夢餘　句を得たり　幽夢の余
15 古今正自同　古今　正に自ら同じ
16 歲月何必書　歳月　何ぞ必ずしも書せん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○谷林堂　『輿地紀勝』巻三七「揚州」景物下に、「谷林堂、大明寺に在り。元祐中に建つ」とあり、蘇軾のこの詩が

七

引かれる。「谷林」の名は、冒頭二句の「深谷」「高林」から取ったと思しいことから、馮応榴は、この詩が成った後にかく命名されたのではないかと指摘する。

1○窈窕　奥深いさま。郭璞「江の賦」（『文選』巻一二）に、「潛逵　傍通して、幽岫　窈窕たり」とある。また、陶淵明「帰去来の辞」（『陶淵明集』巻五）に、「既に窈窕として以て壑を尋ね、亦た崎嶇として丘を経」とある。2○扶疎　木の枝葉が繁茂するさま。『韓非子』揚権篇に、「人君為る者は、数しば其の木を披き、木枝をして扶疎たらしむる毋かれ」とある。また、陶淵明「山海経を読む　十三首」その一（『陶淵明集』巻四）に、「孟夏　草木長じ、屋を遶りて樹は扶疎たり」とある。3○美哉　春秋時代、晉の献文子が家を建てたとき、張老がそれを祝って、「美なる哉　輪たり、美なる哉　奐たり」（輪は高く大きいさま。奐は美しいさま）に始まる祝辞を述べた故事をふまえる（『礼記』檀弓下）。5○過雨　通り雨。「都を出でて陳に来たる。乗る所の船上に……」（八首）その一の注（『蘇東坡詩集』第二冊六六頁）を参照。6○物至一句　次句以下に述べられる風物が、自分を楽しませてくれる意。7○稚竹　その年に新たに生え出た竹。わかたけ。○可人　人の意にかなうこと。8○霜節一句　成長した竹の表皮や節には、白い粉状のものが付着している。霜節は、稚竹がそれほど立派に育ったことをいう。専車は、車がいっぱいになること。『国語』魯語下に、「昔、禹は群神を会稽の山に致す。防風氏後れて至り、禹　殺して之を戮す。其の骨節は車を専らにす。此れを大なりと為す」とある。9○無頼　もとは人を憎み罵ることば（やくざ者。また、頼りにならない）だが、愛するあまり故意に罵る場合にも用いる。杜甫「鄭駙馬に韋曲に陪し奉る」詩（『杜詩詳注』巻三）に、「韋曲　花　無頼なり、家家　人を悩殺す」とある。10○風花　風に吹かれて落ちる花。「呂梁の仲屯田に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊三四一頁）を参照。12○渓蟬一句　清虚は、心が清らかで私心がないこと。古来、セミは高所に在って清露を飲む、純潔な生き物とされた。曹植「蟬の賦」（『藝文類聚』巻九七に引く）に、「高枝に棲みて首を仰ぎ、朝露の清流に漱ぐ」とある。ここでは、谷林堂に集い読経する僧侶たちをも意識するであろう。13○労生　生きづらい人生をあくせくと生きる。「除夜の病中、段屯田に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四三一頁）を参照。14○幽夢　おぼろげな夢。「喬太博が左蔵に換えられて欽州に知たりと聞き、詩を以て招飲す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四

八

冊八十頁）を参照。16〇歳月一句　杜甫「雨　二首」その二（『杜詩詳注』巻一五）に、「留滞す　一老翁、時を書して朝夕を記す」とある（この「時を書す」は、時事を記す意）。一句について、万里集九は以下の二説を掲げる。江西龍派（続翠）は、谷林堂に詩を題して年月と姓名とを記すことを請われた蘇軾が、それに対して返答したものだという。瑞渓周鳳（北禅）は、およそ詩を題する場合は年月を記すのが普通だが、昔も今も隔たりなく同じなのだから、年月を記す必要はないのだという（『四河入海』巻三の四）。

奥深い谷の底の小暗くしげる林のなかに、新しい御堂がみごとに成ったのは、秋風の吹きはじめた今このとき。私がやって来たときにちょうど雨があがって、まるで万物が（以下のように）私を楽しませてくれるかのようだ。若竹を見て好ましく感じるのは、節に白い霜が置いて、車一台に載せるほどに育ったそのようす。槐の老木は憎らしいやつで、風に吹かれて花で溝を埋めようとする。山の鴉が争って呼び交わすなか、渓谷に啼く蝉だけは清らかさをたもっている。

我が思いを世俗の外に馳せて、おぼろげな夢を見たあとで詩句を得た。この勝境は、それを愛でる人の心とともに、古も今も変わらず在るのだから、（ことさらに）ここに日付けを記しておくこともないだろう。

一八九八・一八九九（施三二―二四・二五）

予少年頗知種松手植數萬株皆中梁柱矣都梁山中見杜輿秀才求學其法戲贈二首

予　少年なりしとき、頗る松を種うるを知る。手づから数万株を植え、皆な梁柱に中れり。都梁山中にして杜輿秀才を見るに、其の法を学ばんことを求む。戯れに二首を贈る

一八九八（施三二―二四）

その一

1　露宿泥行草棘中　　露宿　泥行　草棘の中
2　十年春雨養髯龍　　十年　春雨　髯龍を養う
3　如今尺五城南杜　　如今　尺五　城南の杜
4　欲問東坡學種松　　東坡に問うて松を種うるを学ばんと欲す

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○兵部尚書を以て召還され、揚州より都の開封へ向かう途中の作（孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇五九頁）。○種松　蘇軾は、自ら松を栽培することにしばしば言及しており、「松を種うる法」（『蘇軾文集』巻七三）と題する文では、その方法を詳しく述べる。また、「松を種えて、徠の字を得たり」（『合注』巻一八）、「戯れに松を種うるを作す」（『合注』巻二〇）などの詩にも、そのことが詠じられている。○中梁柱　梁柱は、家のはり（棟を支える横木）とはしら。すなわち建物の中心となる部分で、ここでは松が良材に充てられるほど良く育ったことをいう。韓愈「亀山操」（『韓昌黎集』巻一）に、「亀の枿、梁柱に中らず」（枿は、木の切り株から出た芽）とある。○都梁山　泗州盱眙県（江蘇省）にある山（『太平寰宇記』巻一六）。泗州は水運の要衝で、揚州から開封に向かう途上に位置する。○杜輿　字は子師。盱眙の人。蘇軾について学び、その名と字は蘇軾が命名したことが、晁補之「杜輿子師が名字の序」（『鶏肋集』巻三五）に見える。また、蘇軾に「晁無咎の作る所の杜輿子師の字説の後に書す」（『蘇軾文集』巻六六）がある。○秀才　科挙受験の資格を有する者の称。

1○露宿　屋根のないところで宿ること。野宿。『韓非子』外儲説右上篇に、「是に於て乃ち太子還り走りて舎を避け、露宿すること三日、北面再拝して死罪を請う」とある。○泥行　ぬかるみの中を行くこと。『史記』夏本紀に、「泥行には橇に乗る」とある。○草棘　草といばら。「松を種うる法」（詩題の注を参照）に、松の苗を育てる際の心得とし

て、「須く護るに棘を以てすべし。日び人をして行視せしむれば、三五年にして乃ち成る」と説かれる。2〇十年春雨　同じく「松を種うる法」に、「春初に至らば、其の実を敲取し、大鉄槌を以て荒茅の地中数寸に入れ、数粒を其の中に置けば、春雨を得て自ら生ず」とあり、以下に松を七年にわたって栽培する仕方が述べられる。十年は、十分に成長した意を込めるであろう。〇髯龍　松は樹皮が鱗状で、松葉を茂らせる（髯）ことから、その姿を龍に喩えていう。この言い方は蘇軾に始まると思しいが、松の樹を龍に喩えた例としては、白居易「草堂の記」（『白居易集箋校』巻四三）に、「澗を夾みて古松・老杉有り……修柯は雲を戛り、低枝は潭を払い、幢の竪つが如く、蓋の張るが如く、龍蛇の走るが如し」とある。3〇如今一句　尺五は、一尺五寸。非常に近くにあること。杜甫「韋七賛善に贈る」詩（『杜詩詳注』巻二三）に、「郷里の衣冠　賢に乏しからず、杜陵　韋曲　未央の前、爾が家は最も近し　魁三の象、時論共に帰す　尺五の天」とあり、原注に「俚語に曰く、「城南の韋・杜、天を去ること尺五」と」という（宋・郭知遠『九家集注杜詩』等は、これを杜甫の自注とする）。

いばらの中に植え、露に濡れそぼってぬかるみを歩みながら（世話を続けて）、十年のあいだ春雨の恵みを受けて、立派な枝ぶりの松を育てた。

それが今、そんな東坡に、天子のお膝元に住まわれる杜秀才どのともあろう方が、松の植え方をお尋ねになるとは（何ともおかしなこと）。

一八九九（施三二一―二五）

その二

1　君方掃雪收松子　　君は方に雪を掃いて松子を収め

2　我已開榛得茯苓　　我は已に榛を開いて茯苓を得ん

3　爲問何如插楊柳　　為に問う　何ぞ如かん　楊柳を挿して
4　明年飛絮作浮萍　　明年　飛絮　浮萍と作さんには

1○松子　松の実。杜甫「秋野　五首」その三（『杜詩詳注』巻二〇）に、「風落　松子を収め、天寒に蜜房を割く」とある。2○榛　やぶ。草木の茂み。「十二月十四日の夜、微しく雪ふる……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五五九頁）を参照。○茯苓　和名マツホド。松の根元にできるサルノコシカケ科の菌類で、薬用にする（『国訳本草綱目』第三七巻）。『淮南子』説山訓に「千年の松は、下に茯苓有り」、注に「茯苓は、千歳の松脂なり」とある。冒頭の二句について、一韓智翊は「君ハ杜秀才ヲ云（フ）ゾ。此（ノ）人ハ、寒イトモ云ハズシテ、松ノ子ヲ拾（フ）ゾ。ナゼニナレバ、松ヲ種（ウ）ルコトヲ学（ブ）程ニゾ。我ハ坡自（ラ）云（フ）ゾ。我ハ松ヲ栽（エ）テ久（シキ）程ニ、茯苓ヲ得ベキゾ」と記す（『四河入海』巻一三の四）。34○為問・明年二句　飛絮は、楊柳が春に飛ばす柳絮のこと。浮萍は、浮き草。蘇軾「水龍吟（章質夫が楊花詞に次韻す）」詞（『東坡楽府箋』巻二）に、「暁来　雨過ぎれば、遺蹤　何くにか在る、一池　萍　砕かる」とあり、原注に「楊花　水に落ちて浮萍と為る、之を験るに信に然り」とある。

あなたが積もった雪をはらって松の実を拾いあつめ（て種をまく準備をす）る頃には、私はもうとっくに雑木を切り開いて、松の木から茯苓を摘んでいるでしょう。

いっそのこと楊柳を育てることになさってはいかがでしょうか。それなら（松のように時間をかけずとも）来年の春には柳絮を飛ばし、それがやがては浮き草に姿を変えるでしょうから。

（担当　西岡　淳）

一九〇〇（施三二一―二六）

行宿泗閒見徐州張天驥次舊韻

行きて宿・泗の問に徐州の張天驥に見えて、旧韻に次ぐ

1 二年三躡過淮舟　二年三たび躡む　淮を過ぐる舟
2 款段還逢馬少游　款段　還た逢う　馬少游
3 無事不妨長好飲　事無くして　妨げず　長く飲を好むを
4 著書自要且窮愁　書を著すに　自ら要む　且く窮愁せんことを
5 孤松早偃元非病　孤松の早に偃すは　元と病めるに非ず
6 倦鳥雖還豈是休　倦鳥の還ると雖も　豈に是れ休せんや
7 更欲河邊幾來往　更に河辺に幾たびか来往せんと欲する
8 祇今霜雪已蒙頭　祇だ今　霜雪の已に頭に蒙れり

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○宿泗　宿州（安徽省）は汴河沿いの、泗州（江蘇省）は淮河沿いの、ともに交通の要衝であった。○徐州張天驥　張天驥（字は聖塗。号は雲龍山人。一〇四〇～？）は徐州の人であり、蘇軾「雲龍山人張天驥に過る」詩（『蘇東坡詩集』第四冊二九三頁）は熙寧十年（一〇七七）蘇軾が徐州の知事であったときに作られた。張天驥については、「次韻して張山人の彭城へ帰るを送る」詩（『蘇軾詩注解（六）』）の注も参照。○次旧韻　元祐五年（一〇九〇）杭州の知事であったときの「次韻して張山人の彭城へ帰るを送る」詩（同上）の韻を用いている。

1○二年一句　ここでは元祐六年から七年にわたる二年間に三度淮河を船で通ったことをいう。一度目は、元祐六年四月に翰林学士承旨として召還せられて、杭州から開封へ赴いたとき。二度目は、八月に潁州の知事となった蘇軾が、元祐七年三月に揚州の知事に転じて、潁州から揚州に赴いたとき。三度目は、七月に兵部尚書に任ぜられて、この詩が詠じられた九月に揚州から開封へと赴く途上においてである。2○款段一句　『後漢書』馬援伝に「（馬援）従容と

して官属に謂いて曰く、「吾が従弟の（馬）少游は常て吾の慷慨して大志多きを哀れんで曰く、「士、一世に生まれては、但だ衣食裁かに足り、下沢車（沼沢地を行く軽便な車）に乗り、款段馬（歩みののろい馬）を御し、郡の掾吏と為り、墳墓を守り、郷里に善人と称せらるるを取れば、斯れ可なり。盈余を致き求むるは、但だ自ら苦しむ耳」と。……」と」とある。ここでは張天驥を、このような生き方をよしとした馬少游になぞらえている。なお、款段は『後漢書』の李賢の注に「款とは猶お緩のごときなり、形段（歩む里程）の遅緩なるを言う」とあり、馬のあゆみののろいことをいう。3○無事一句　これという大事がないので、いつも好んで酒を飲んでいる。『史記』張儀伝に、張儀とともに秦の恵王に仕えて、その寵を争った陳軫が、秦を去って楚王に仕えることとなり、犀首（公孫衍）に計略を依頼するために会ったときの言葉として、「陳軫曰く「公　何ぞ飲を好むや」と。犀首曰く「事無きがゆえなり」と。（陳軫）曰く「吾れ公をして事に厭かしむるを請う、可ならんや」と」とある。4○著書一句　『史記』虞卿伝に、虞卿が晩年の不遇のなかで、国家の得失を批判的に示した「虞氏春秋」を著したことについて、「太史公曰く、「……然れども虞卿の窮愁に非ずば、亦た書を著して、以て自ら後世に見す能わざりしならん」と」とある。杜甫「王中允に贈り奉る」詩（『杜詩詳注』巻六）に「窮愁　応に作有るべし、試みに誦す　白頭吟」とある。困難ななかでこそ優れた文章を後世に残すことができるとする故事をかりて、蘇軾はしばらく艱難のなかに身をおくことにするという。且は『合注』では見につくるが、施注に従う。5○孤松一句　孤松早偃は、一本松が上に伸びず、枝を横に伸ばすことをいう。劉禹錫「廟庭の偃松の詩　并びに引」（『劉禹錫集箋証』巻二五）に「侍中の後閤の前に小松有り、年を待たずして偃す」とある。『酉陽雑俎』巻一八に「松の命根は、石に遇えば、則ち偃蓋すること必ずしも千年ならざるなり」とある。ここでは『四河入海』巻一の三の一韓智翊の聞書に「其ノ偃（シ）テマガルハ、ワルウ松ガ病デハナイゾ。其（レ）ガ幸（イ）デ有（ル）ゾ。此（ノ）山人モ、モトカラ、ヒッコウデ、仕（エ）ザ（ル）ガ、幸（イ）デアルゾ」とあるように、張天驥が官に就かずにいることをさす。元は『合注』では原につくるが、施注に従う。6○倦鳥一句　陶淵明「帰去来兮の辞　并びに序」（『陶淵明集』巻五）に「雲は無心に以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦きて還るを知る」とあるように、もともと倦鳥は、宮仕えを辞して故郷に帰る者をたとえていう。ここでは『四河入海』の一韓智翊の

聞書に、「坡言（フココロ）ハ、我ガ此（ノ）間、外任ニアツタハ、鳥ノ飛（ブ）ニ倦（キ）テ、帰ル事ヲ知（リ）タ（ル）モノゾ。其（レ）ハ真実休シハツル者デハナイゾ……」とあるように、倦鳥は外任を終えて都に還る蘇軾自身を指している。休とは帰休のこと。陶淵明「斜川に遊ぶ　幷びに序」（『陶淵明集』巻二）に「開歳倏ち五日、吾が生　行ゆく帰休せんとす」とある。8〇霜雪已蒙頭　老いて白髪頭であること。杜甫「杜位に寄す」詩（『杜詩詳注』巻一〇）に「干戈　況んや復た塵　眼に随う、鬢髪　還た応に雪の頭に満つるなるべし」とある。

わたしは二年に三たびも淮河を行き来する船に乗るはめになり、歩みののろい馬にまたがる馬少游のようなあなたにまたもお目にかかりました。あなたは何事にも妨げられることなく、ずっとほしいままにお酒を飲んでおられる。わたしのほうは良いものを書くためにしばらくは自ら悩み苦しむことにいたしましょう。

孤高なる松が若くしてその枝を枉げているのは、もともと何の病でもありません。飛ぶのに倦きた鳥はねぐらへ還っても、休むことはできないのです。これから何度この河のほとりを行き来しようというのでしょう、いまでもすでに霜や雪と見紛う白髪が頭を覆っておりますのに。

一九〇一（施三二一―二七）

次韻劉景文贈傅義秀才

劉景文が傅義秀才に贈るに次韻す

1　幼眇文章宜和寡　　幼眇たる文章　宜しく　和　寡なかるべし

2　崢嶸肝肺亦交難　　崢嶸たる肝肺も　亦た交わり難し

3　未能飛瓦彈清角　　未だ瓦を飛ばして清角を弾くこと能わざるも

4　肯便投泥戲潑寒　　肯て便ち泥を投げて潑寒に戯れんや
5　忽見秋風吹洛水　　忽ち秋風の洛水を吹くを見て
6　遙知霜葉滿長安　　遙かに霜葉の長安に満つるを知る
7　詩成送與劉夫子　　詩成りて送りて劉夫子に与う
8　莫遣孫郎帳下看　　孫郎が帳下をして看せ遣むる莫かれ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○劉景文　劉季孫（字は景文）のこと。元祐六年（一〇九一）に隰州（山西省）の知事となった劉景文は、元祐七年五月にその地で亡くなった（『蘇軾詩注解（十七）』に収める作品番号一八二五の詩の注を参照）。本詩は劉季孫死去の知らせを受け取るまえに作られたと考えられる。○傅羲秀才　傅羲については未詳。秀才は、本来は科挙の受験資格を有する者をいう。劉季孫が傅羲に贈った詩は現存しない。

1○幼眇　音楽の奥深さをいう。揚雄「長楊の賦　幷びに序」（『文選』巻九）に「糸竹晏衍の楽を抑え止め、鄭衛幼眇の声を聞くことを憎む」とある。『漢書』元帝紀に「元帝は材芸多くして史書を善くす。琴瑟を鼓きて、洞簫を吹く。自ら曲を度り、歌声を被らしめ、節度を分刌ち、幼眇を窮極む」とある。その顔師古の注には「幼眇は読みて要妙と曰う」とある。ここでは、文章の奥深さをいう。○和寡　優れたものに唱和するものがないことをいう。宋玉「楚王の問いに対う」（『文選』巻四五）に「其れ陽春・白雪を為せば、国中属いて和する者は数十人に過ぎず、……是れ其の曲の彌いよ高くして其の和するもの彌いよ寡なし」とある。2○崢嶸　山が高くそびえたつさま。蘇軾「劉景文が贈らるるに和す」詩（『蘇軾詩注解（十七）』）に、「元龍が本志　曹・呉を陋んず、豪気　崢嶸として老いて除きず」と、劉季孫の剛毅な気性がなみなみならぬことを詠じている。○肝肺　内臓、つまりは心を指す。杜甫「鉄堂峽」詩（『杜詩詳注』巻八）に「飄蓬　三年を踰ゆ、首を回らせば肝肺熱す」とある。蘇軾「劉景文が贈らるるに和す」詩（『蘇軾詩注解（十七）』）に「一篇　人に向かって肝肺を写し、四海　我が霜鬢須を知る」とある。3○未能一句　『韓非子』

十過篇に、晉の平公が徳のあるものしか聴いてはいけないとされる清角（黄帝が泰山で鬼神とまみえたときに奏された音楽）を、楽人師曠に無理やり弾かせたので、「一たび奏すれば、而して玄雲の西北の方従り起こる有り、再び之を奏すれば大風至りて大雨之に随い、帷幕を裂き、俎豆（祭器）を破り、廊瓦を隳とす」ことになったとある。ここでは、1句で述べられた劉季孫の詩文の奥深さが、一般には理解されがたい意を込める。4〇潑寒　潑寒胡戯のことをいう。外来のもので、身体に水をかけ泥をまいて、ときには裸で踊った。神龍元年（七〇五）十一月に「洛城の南門の楼に御し、潑寒胡戯を観る」（『旧唐書』中宗紀）とあり、皇帝までも楽しんだものだったが、その後、中書令の張説が「且つ潑寒胡は未だに典故を聞かず、裸体にて跳足するは、盛徳　何ぞ観ん。水を揮い泥を投げ、容を失うこと斯れ甚し」（『旧唐書』張説伝）と諌めたために、禁止された。ここでは、2句で述べられた剛毅な気性の劉季孫は、礼教の枠組みを超えることはないことをいう。『四河入海』巻一の三の一韓智翃の聞書に、「景文ハ篤実ナル人ナル程ニ、チツトモ道デナイ事ヲバセヌゾ……景文ハ、非道ナルコトヲバ、カリソメノ事ニモ、セヌゾト云（フ）心ゾ」とある。5 6〇忽見・遙知二句　『唐摭言』巻一一「無官受黜」の条にみえる賈島の故事に、「嘗て驢に跨り、蓋を張りて、天衢を横截る。時に秋風正に厲しく、黄葉　掃う可し。（賈）島忽ち吟じて曰く、「落葉　長安に満つ」と。志重く其れ口を衝いて直ちに致す。之の一聯を求むれども杳として得る可からず、身の従う所を知らざるなり」とある。賈島「江上の吳処士を憶う」詩（『全唐詩』巻五七二）では「秋風　渭水に生じ、落葉　長安に満つ」とされている。洛水は洛陽へと流れる川ではあるが、ここでは都開封へ通じる汴河を洛水になぞらえているのであろう。7 8〇詩成・莫遣二句　『三国志』呉書・張昭伝の裴松之の注に引かれた『典略』のなかに、つまらぬ文章は孫策の幕下の若造にでも読ませておけ、といった故事が使われている。蘇軾「次韻して劉景文左蔵に答う」詩（『蘇軾詩注解（三）』）にも「但だ賀監杯中の物を空しくせよ、孫郎が帳下の児に示すこと莫かれ」と、この故事が用いられている。夫子は、男子の尊称である。「前韻に次ぎて劉景文を送る」詩（『蘇軾詩注解（十七）』）にも劉季孫を指して「豈に謂わんや　夫子の駕を復た迂げんとは」と詠じている。

（劉どのの）奥深い詩文に調子をあわせられる人などおりますまい、なみなみならぬ剛毅なご気性に、交わ

ることもまた難しい。（理解されぬからといって劉どのは）かの師曠のように清角の曲を弾いて嵐を起こすことはなさらないし、（そのご気性とあっては）唐の潑寒胡戯のようにあえて泥を投げて戯れることもなされますまい。

ふと都へ流れる川に吹きつける秋風を目にすれば、枯れ葉の舞い散る都のさまがはるかに偲ばれます。詩ができあがったので劉どのにお送りいたしますが、どうか武骨な部下にはお見せくださいますな。

（担当　中　純子）

一九〇二（施注三二―二八）

在彭城日與定國爲九日黄樓之會今復以是日相遇於宋凡十五年憂樂出處有不可勝言者而定國學道有得百念灰冷而顔益壯顧予衰病心形俱瘁感之作詩

彭城に在りし日、定国と九日黄楼の会を為す。今復た是の日を以て宋に相遇う。凡そ十五年、憂楽出処、勝げて言う可からざる者有り。而して定国は道を学びて得ること有り。百念　灰のごとく冷めて顔益ます壯なり。顧みるに予は衰病して心形倶に瘁れたり。之に感じて詩を作る

1　菊盞萸囊自古傳　　菊盞・萸嚢　古自り伝う
2　長房寧復是臞仙　　長房は寧ろ復た是れ臞仙ならんや
3　應從漢武横汾日　　応に漢武の汾に横たわりし日従り
4　數到劉公戲馬年　　数えて劉公が戯馬の年に到るべし
5　對玉山人今老矣　　玉山に対する人　今老いたるも

6　見恒河性故依然　　恒河を見る性　故と依然
7　王郎九日詩千首　　王郎　九日の詩　千首
8　今賦黄楼第二篇　　今　黄楼第二篇を賦す

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○彭城　今の江蘇省徐州。蘇軾は熙寧十年（一〇七七）二月に知徐州を命じられて同年四月に着任した（孔凡礼『蘇軾年譜』上冊三六〇頁）。○定国　王鞏の字。「顔復を送り、兼ねて王鞏に寄す」詩の詩題の注（『蘇東坡詩集』第四冊二七八頁）を参照。○黄楼　元豊元年（一〇七八）八月に徐州で落成したたかどの。蘇軾はその前年の熙寧十年におこった洪水（『蘇東坡詩集』第四冊三六五頁に収める「河復」詩の叙を参照）で被害をうけた徐州の城の改修工事をおこない、覇王庁というふるい建物を撤去して新たに黄楼を築き（『蘇東坡詩集』第四冊六五五頁に収める「范祖禹に答う」詩の原注を参照）、元豊元年九月九日に落成を祝う式典をおこなった。王鞏もこれに出席した（孔凡礼『蘇軾年譜』上冊四〇三頁）。蘇軾はこのとき「九日　黄楼の作」（『合注』巻一七）などの詩を作っている。○相遇　元祐七年七月に兵部尚書をもって召還せられ、揚州から都に向かう途中、同年九月九日に宋城（南都ともいった。今の河南省商丘）で王鞏に遇っている（孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇六〇頁）。○十五年　元豊元年から元祐七年までの時間をいう。○出処　出仕することと隠退すること。『周易』繫辞上に、「君子の道は、或るときは出で或るときは処る」とある。○灰冷　雑念が生じないことを燃え尽きた灰にたとえる。蘇軾は「参寥師に送る」詩（『合注』巻一七）でも、「上人　苦空を学ぶ、百念　已に灰のごとくに冷めたり」と詠じている。

12○菊盞・長房二句　梁の呉均『続斉諧記』にみえる費長房の故事を踏まえる。長房は友人の桓景に九月九日に災いがおこるのですぐに家に帰るように勧めて、「家人をして各おの絳嚢を作り、茱萸を盛って以て臂に繫ぎ、高みに登りて菊花酒を飲ましめば、此の禍は除く可し」と言った。桓景がその通りにすると家畜は死んだが一家は無事だった。『後漢書』方術伝には、もとは市の役人だった費長房は仙術を学ぼうとして果たさないまま家に戻ったが、師の老人

から授かった符の力によって「能く衆病を医療し、百鬼を鞭笞」したという。○萸囊　茱萸の実を入れた袋。茱萸はカワハジカミ。「明日重九　亦た病を以て述古の会に赴かず　再び前韻を用う」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊一一四頁）を参照。○臞仙　臞は痩せていること。『史記』司馬相如伝に、「相如以為えらく　列仙の伝えは、山沢の間に居り、形容甚だ臞せたり」とある。34○応従・数到二句　重陽の大がかりな遊びが漢の武帝に始まり、宋公時代の劉裕にまで至ることをいう。漢の武帝「秋風の辞」（『文選』巻四五）に、「楼船を泛かべて汾河を済り、中流に横たわりて素波を揚ぐ」とある。また『南斉書』礼志上に、「宋武　宋公為りしとき、彭城に在り。九日、項羽の戲馬台に出づ、今に至るも相承けつがれて、以て旧准と為す」とある。戲馬台は項籍（字は羽）が築いたと伝えられる台地。「陽関の詞　三首」その一の注（『蘇東坡詩集』第四冊三〇七頁）を参照。5○玉山　玉を産する山。転じて容姿や徳性が優れていることのたとえ。ここでは王鞏をいう。『世説新語』容止篇に、「嵇叔夜の人と為りや、巖巖として孤松の独立するが若し。其の酔うや、傀俄として玉山の将に崩れんとするが若し」とある。6○見恒河性一句　恒河はガンジス河をいう。『楞厳経』巻一（『大正蔵』第一九）に、「仏言えらく、「我れ今汝に不生滅性を示さん。大王よ、汝年幾ばくなりし時に恒河の水を見たるか」と」とあり、大王が、最初に見たのは三歳の時だったが、六十二歳になった今見ても何ら異なるところはないと答えると、仏はそこで、「大王よ、汝　面は皺よると雖も、此に精性未だ曾て皺よらざるを見たり。皺よる者は変を為し、彼の皺よらざる物は変に非ず。変なる者は滅を受け、不変なる者は元より生滅無し」と諭した。一句は王鞏の気質が十五年の時を経ても変わらないことをいう。7○王郎一句　道の教えを感得した王鞏なら重陽の詩を千首も作りうるであろうという意。杜甫「見えず」詩（『杜詩詳注』巻一〇）に、「敏捷詩千首、飄零　酒一杯」とある。8○今賦一句　王鞏がここで作る詩が元豊元年に黄楼で詠じて以来の第二篇となることをいう。

重陽の菊花の酒や茱萸の袋は今に至るまで伝わっていますが、これを教えた費長房は痩せこけた冴えない仙人などではなかったのです。重陽の宴も漢の武帝が汾河に船を浮かべた日から、宋公劉裕が戲馬台に遊んだ年

まで数えることができましょう。

（貴君のような）優れた方に向き合っているわたしは今や老いてしまいましたが、貴君の品性は恒河のたたずまいと同様に昔のままです。（貴君）王君は九日の詩をこれから千篇もお作りになることでしょうから、さしずめこの地で詠むのが黄楼の会以来の第二篇となりますね。

（担当　中　裕史）

一九〇三（施三二――二九）

九日次定國韻

九日、定国が韻に次ぐ

1 朝菌無晦朔　朝菌　晦朔無く
2 蟪蛄疑春秋　蟪蛄　春秋を疑う
3 南柯已一世　南柯　已に一世
4 我眠未轉頭　我れ眠りて未だ頭を転ぜず
5 仙人視吾曹　仙人　吾が曹を視ば
6 何異蜂蟻稠　何ぞ蜂蟻の稠きに異ならん
7 不知蠻觸氏　知らず　蛮触氏
8 自有兩國憂　自ら両国の憂い有るを
9 我觀去來今　我れ去来今を観るに

10 未始一念留
11 奔馳竟何得
12 而起無窮羞
13 王郎誤涉世
14 屢獻久不醻
15 黄金散行樂
16 清詩出窮愁
17 俯仰四十年
18 始知此生浮
19 軒裳陳道路
20 往往兒童收
21 封侯起大第
22 或是君家騶
23 似聞負販人
24 中有第一流
25 炯然徑寸珠
26 藏此百結裘
27 意行無車馬
28 倏忽略九州

未だ始めより一念を留めず
奔馳して竟に何をか得ん
而も無窮の羞を起こす
王郎　誤って世を渉り
屢しば献ずれども久しく酬いられず
黄金は行楽に散じ
清詩は窮愁より出づ
俯仰　四十年
始めて此の生の浮なるを知る
軒裳　道路に陳ねて
往往にして児童収む
封侯　大第を起こす
或いは是れ君が家の騶
聞くに似たり　負販の人
中に第一流有り、と
炯然たる径寸の珠
此の百結の裘に蔵す
意行　車馬無く
倏忽に九州を略す

29 邂逅獨見之　邂逅　独り之を見る
30 天與非人謀　天の与うるなり　人の謀るに非ず
31 笑我方醉夢　笑う　我が酔夢に方りて
32 衣冠戲沐猴　衣冠　沐猴の戯るを
33 力盡病騏驥　力尽きて　騏驥病み
34 伎窮老伶優　伎窮まって　伶優老ゆ
35 北山有雲根　北山に雲根有り
36 寸田自可耰　寸田　自ら耰る可し
37 會當無何鄉　会らず当に無何の郷
38 同作逍遙遊　同に逍遙遊を作すべし
39 歸來城郭是　帰り来たらば　城郭は是にして
40 空有纍纍丘　空しく累累たる丘有るのみ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○九日　九月九日。重陽節・菊の節句の称もある。○定国　王鞏のこと。定国はその字。「顔復を送り、兼ねて王鞏に寄す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二七八頁）を参照。

12○朝菌・蟪蛄二句　朝菌は、キノコの一種で、朝に生えて晩れには枯れる。晦朔は夜と朝のこと。蟪蛄は夏ぜみで、春と秋を知らない。『荘子』逍遙遊篇に「朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なり」とある。

3○南柯　唐・李公佐「南柯太守伝」をふまえる。淳于棼が、酒に酔って槐樹（エンジュ）の下で眠って見た夢の中で、大槐安国で南柯郡の太守になり、栄華富貴の中で二十年を過ごした。夢が覚めて槐樹の下を見ると、そこに蟻の巣が

あったという話（『太平広記』巻四七五に引く『異聞録』）。4〇転頭　頭を回す。ここでは寝返りを打つ短い間のこと。白居易「自ら詠ず」詩（『白居易集箋校』巻三四）に、「百年　手に随いて過ぎ、万事　頭を転じて空し」とある。5〇吾曹　われわれ。一人称複数の代名詞。7 8〇不知・自有二句　蛮触氏は、カタツムリの右の角の上の国の蛮氏と、左の角の上の国の触氏。二句は、その両国が領地争いをしたという、いわゆる「蝸牛角上の争い」の故事をふまえる。『荘子』則陽篇に「蝸の左角に国する者有り、触氏と曰う。蝸の右角に国する者有り、蛮氏と曰う。時に相与に地を争いて戦う。伏尸数万、北ぐるを逐い、旬有五日にして而る後に反れり」とある。9〇去来今　仏教語で、過去と未来と現在。『維摩経』観衆生品（『大正蔵』第一四巻）に、「皆な世俗の文字と数とを以ての故に、三世有りと説けども、菩提に去来今有りと謂うに非ず」とある。10〇一念　仏教語で、きわめて短い時間をいう。「病に臥して月を弥り、垂雲の花開くと聞く……」詩の注（『蘇軾詩注解（五）』）を参照。11〇奔馳　忙しく駆け回ること。12〇而起一句　起羞は、恥をかくこと。『尚書』説命中に、「惟れ口は羞を起こし、惟れ甲冑は戎を起こす」とある。13 14〇王郎・屢献二句　王郎は王定国をさす。献酬は、酒杯をやりとりすること。献は、酒を勧める。酬は、返杯。陶淵明「斜川に遊ぶ」詩（『陶淵明集』巻二）に「壺を提げて賓侶を接ね、満を引いて更ごも献酬す」とある。二句は、酒席の応酬に喩えて、王定国の人生の不遇をいう。15〇黄金一句　李白「将進酒」（『李太白全集』巻三）に、「天の我が材を生ずる　必ず用有らん、千金散じ尽さば還た復た来たらん、羊を烹　牛を宰りて且く楽しみを為せ、会ず須らく一飲三百杯なるべし」とある。16〇清詩一句　すぐれた詩は不遇の苦しみから生み出されること。司馬遷のいわゆる発憤著書説に淵源し、後には韓愈が「荆潭唱和詩の序」（『韓昌黎集』巻二〇）で、「夫れ和平の音は淡薄にして、而して愁思の声は要妙なり。讙愉の辞は工にし難く、而して窮苦の言は好くし易きなり」という。欧陽修「梅聖俞詩集の序」（『欧陽文忠公集』巻四二）などもその考えを承け、また蘇軾もそうした認識を述べている。「張安道が「杜詩を読む」に次韻す」（『蘇東坡詩集』第二冊七四頁）、「僧恵勤　初めて僧職を罷む」（『蘇東坡詩集』第三冊三四四頁）を参照。17〇俯仰　うつむくと、あおむくと。また、あるいは上がり、あるいは下がる意から、世と調子を合わせること。司馬遷「任少卿に報ずる書」（『文選』巻四一）に「故に且に俗に従いて浮沈し、時と与に俯仰し、以て其の狂惑を通ぜ

ん」とある。18○此生浮　『荘子』刻意篇に「其の生や浮かぶが若く、其の死や休うが若し」とある。19○軒裳　高位の人。軒は、高官の乗る車。裳は、貴人の服。唐・沈佺期「洛陽道」詩（『全唐詩』巻九六）に「白日　青春の道、軒裳　半ば下朝す」とある。21○大第　大きな邸宅。豪邸。22○騶　うまかい。車馬を扱う役。23 24○似聞・中有二句　負販人は、品物を背負って売り歩く人。『礼記』曲礼上に「夫れ礼は、自ら卑くして而して人を尊ぶ。負販の者と雖も、必ず尊ぶ有るなり」とある。第一流は、第一等の地位にある人。『世説新語』品藻篇に、「桓大司馬の都に下るや、真長（劉惔）に問いて曰く、「聞く、会稽王が語　奇だ進めり、と。爾るや」と。劉曰く、「極めて進めり。然れども故より是れ第二流中の人なるのみ」と。桓曰く、「第一流は復た是れ誰ぞ」と。劉曰く、「正に是れ我が輩なるのみ」と」とある。25○径寸珠　径寸は、さしわたし一寸。『史記』田仲敬完世家に、「梁王曰く、「寡人の国の若きは小なれども、尚お径寸の珠、車の前後を照らすこと各おの十二乗なる者　十枚有り、奈何ぞ万乗の国を以てして宝無からんや」と」とある。26○百結裘　つぎはぎだらけの着物。『藝文類聚』巻六七に引く王隠『晉書』に、「董威輦は、残砕の繒を得る毎に、輒ち結びて以て衣と為し、号して百結と曰う」とある。27○意行　心のおもむくままに行くこと。『管子』内業篇に、「利を見て誘われず、害を見て懼れず、寛舒にして仁に、独り其の身を楽しむ。是れを雲気と謂い、意の行くこと天に似たり」とある。28○倏忽　たちまち。○略　かすめて飛ぶ意で、掠に同じ。○九州　禹が中国全土を九つの州に分けたことから（『尚書』禹貢）、中国全土を指す。「石蒼舒の醉墨堂」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二六頁）を参照。29○邂逅　期せずして会う。『詩経』鄭風「野有蔓草」に「邂逅して相遇えり、我が願い適えり」とある。30○天与　天が与えたもの。『史記』越世家に「且つ夫れ天の与うるを取らざれば、反って其の咎を受く」とある。○人謀　人の営み。欧陽修「聖俞を哭す」詩（『欧陽文忠公集』巻八）に、「乖離　会合　由無しと謂うも、此れ会ず天幸にして人謀に非ず」とある。32○衣冠一句　沐猴は、猿。一句は、猿が冠をつけて人の格好をしていること。『史記』項羽本紀に、「人は言う、「楚人は沐猴にして冠するのみ」と。果して然り」とある。33○騏驥一句　騏・驥いずれも、優れた馬のこと。駿馬。『荘子』秋水篇に「騏驥驊騮、一日にして千里を馳す」とある。また、『戦国策』斉策五（校注巻四）に、「騏驥の衰うるや、駑馬　之に先んず」とある。34○伎窮　わざや能力を使

いはたすこと。伎は、技に同じ。『荀子』勧学篇に「螣蛇は足無くして飛び、梧鼠は五技にして窮す」とある。伶優は、わざおぎ。倡優。35○北山一句　北山は、南京の鍾山。孔稚珪「北山移文」（『文選』巻四三）は、鍾山に隠棲していた周顒が詔勅に応じて出仕しようとしたため、鍾山の霊がそれを告発して行かせないようにしたという内容の文章で、これにより北山は隠遁の地の代名詞となった。雲根は、石の異称。雲は高山の岩石から生ずると考えられた。唐・賈島「李凝の幽居に題す」詩（『長江集』巻四）に「橋を過ぎて野色を分かち、石を移して雲根を動かす」とある。36○寸田　道教で、三丹田のこと。上丹田は眉の間、中丹田は胸の中央、下丹田はへその下。『雲笈七籤』巻一一に引く『黄庭内景経』瓊室章に、「寸田尺宅は生を治す可し」とあり、梁丘子の注に、「三丹田の宅を謂う。各おの方一寸なり、故に寸田と曰う」とある。37 38○会当・同作二句　無何郷は、何も存在しない地。虚無の仙境。『荘子』逍遙遊篇に、「今　子に大樹有りて、其の用無きを患う。何ぞ之を無何有の郷、広莫の野に樹え、彷徨乎として其の側に無為にし、逍遙乎として其の下に寝臥せざる」とある。逍遙遊は、何ものにも束縛されず、楽しんで自適する境地のこと。39 40○帰来・空有二句　仙人丁令威の故事をふまえる。もと遼東の人である丁令威は、道を学び、鶴に姿を変えて故郷に帰った。すると少年に弓で射られそうになったので、「城郭は故の如きも人民は非なり、何ぞ仙を学ばざる　塚　累累たり」と言って飛び去った（『搜神後記』巻一）。

キノコは朝と夜のあることを知らず、セミは春と秋のあることを信じない。南柯国で一生の栄華を享受したようでも、実は寝返りさえしない短い眠りの間のこと。仙人の目から見れば、我々はハチやアリが群れているのと何の違いもないだろう。我々には分からないが、カタツムリの角にある「蛮」と「触」の二国の間にも、それなりに戦いの原因になることがあるのだ。

過去・現在・未来にわたって見渡してみれば、ほんの一瞬たりとも安定した状態はない。俗世を駆けずり回って、いったい何が得られるというのか。ただ尽きせぬ恥辱を生むばかりだというのに。

あなたは世渡りの仕方を誤ってしまい、天子のためによく力を尽くしたのだが、その報いはなかなか得られ

なかった。大金を（憂さ晴らしの）行楽に使い果たしたけれども、不遇であるためにこそすばらしい詩ができたのだ。世の中であくせくと生きること四十年、やっと人生があてどのないものであることが分かったことだろう。高官の馬車や服などは道ばたに捨て置かれるほどのつまらぬもの、それを手に入れて喜ぶのは子供らだと決まっている。高位にのぼり豪邸を建てた者たちは、かつてはお宅の馬飼いだったほどの人物かもしれないのだ。

聞くところによれば、棒手振りの商いをするような者の中にも、一流のすぐれた人物がいるそうだ。それは喩えてみれば、光輝く大きな真珠が、ぼろぼろの着物の下に隠されているようなもの。（あなたは）役所の車馬など要らずに気の向くまま、あっという間に天下を巡っていらしゃった。そんな自由の身のあなたに全く偶然に出会ったのは、天の計らいであって人の謀るところではなかろう。

お笑い草だ。わたしは酔っ払って夢うつつの中で、役人の衣服を身にまとって戯れる猿も同然。あたかも力を使い尽くして病にかかった馬か、また老いて芸に行きづまった芸人のようなものだ。北山には（雨をもたらす雲が湧き出る）石があるから、丹田を養うことができよう。存在するものがないという神仙の世界へ行って、共にのびのび楽しみ気ままに遊ぼう。そこから（人の世に）帰れば、恐らく町並みは残ってはいても人の姿はもう消えていて、目に付くのは累々たる墓のみだろう。

（担当　蔡　毅）

一九〇四（施注三二―三〇）

召還至都門先寄子由

召し還されて都門に至りて、先ず子由に寄す

二七

1 老身倦馬河堤永
2 踏盡黄榆緑槐影
3 荒鷄號月未三更
4 客夢還家時一頃
5 歸老江湖無歳月
6 未塡溝壑猶朝請
7 黄門殿中奏事罷
8 詔許來迎先出省
9 已飛青蓋在河梁
10 定餉黄封兼賜茗
11 遠來無物可相贈
12 一味豊年説淮潁

老身　倦馬　河堤永く
踏み尽くす　黄榆・緑槐の影
荒鶏　月に号んで未だ三更ならず
客夢　家に還る　時に一頃
帰って江湖に老いんとするに歳月無し
未だ溝壑を塡たさざるに猶お朝請す
黄門殿中　事を奏し罷めて
詔して許され　来たり迎えて　先ず省を出づ
已に青蓋を飛ばして河梁に在り
定めて黄封と賜茗兼を餉らん
遠来　物の相贈る可き無し
一味　豊年　淮・潁を説かん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○至都門　蘇軾は元祐七年九月に開封（汴京）に到着した。『合注』巻三六に、「七年九月、広陵自り召し還されて復た浴室の東堂に館す……」詩がある。

1○河堤　通済渠（汴水ともいう）の堤防。その東段は開封から商丘、宿州などを経て淮水に通じていた。2○黄榆　榆はニレ。蘇軾は「御史台の榆・槐・竹・柏　四首」その一（『合注』巻一九）でも、「我れ堤の上を行き、厭くるまで榆陰の緑なるを見る」と、汴水の堤に沿って榆が続いているさまを詠じている。○緑槐　槐はエンジュ。3○荒鶏　真夜中になく鶏。『晉書』祖逖伝に、「（逖）中夜に荒鶏の鳴くを聞き、（劉）琨を蹴って覚めしめて曰く、「是れ悪声

に非ざるなり」と」とある。4〇客夢一句　『太平広記』巻七四に引く『慕異記』（『纂異記』の誤りか）にみえる陳季卿の話を踏まえる。受験のために家を離れて十年になる陳は、青龍寺で終南山翁という老人に遇った。陳が家に帰りたいと漏らすと、老人は竹の葉で舟を作り、壁にかかった絵に描かれた渭水の中に浮かべて、「公、但だ此の舟を注目せよ。則ち公の向来の願う所の如くならん耳」といった。陳がいわれた通りにすると、舟が動いて十日余りで家に着いた。陳は妻や兄弟としばらく言葉を交わすとすぐにまた舟に乗った。そうして青龍寺に戻ってみると老人は陳が出かけた時のままやはり爐のそばに座っていた。〇一頃　瞬間。非常に短い時間をいう。『広弘明集』巻二七上に、「何をか検校と謂う。我が此の身を検して、旦従り中に至り、中従り暮れに至り、暮れ従り夜に至り、夜従り暁に至り、乃ち一時・一刻・一念・一頃に至る」とある。6〇未填一句　生命あるうちに都に戻ってこられたことをいう。填溝壑は死んで十分な葬送を得ないこと。『史記』趙世家に、「左師公曰く、「老臣が賤息は舒祺最も少くして不肖なり。而るに臣衰えて窃かに之を憐れみ愛す。願わくは黒衣の欠を補って以て王宮を衛らしむるを得ん。昧死して以て聞こゆ」と。太后曰く、「敬諾。年幾何なるか」と。対えて曰く、「十五歳なり。少しと雖も、願わくは未だ溝壑を填たさざるに及んで之に託さん」と」とある。杜甫「酔時の歌」（『杜詩詳注』巻三）に、「但だ覚ゆ　高歌して鬼神有るを、焉ぞ知らん　餓死して溝壑を填たすを」とある。〇朝請　臣下が皇帝に拝謁すること。『史記』魏其侯伝に、「太后は竇嬰の門籍を除いて、入りて朝請するを得ざらしむ」とある。裴駰の集解に、「律、諸侯春に天子に朝するを朝と曰い、秋を請と曰う」とある。7〇黄門　門下省のこと。蘇軾が都に還ったとき、蘇轍は門下侍郎の職にあった（孔凡礼『三蘇年譜』第三冊二三七九頁）。蘇轍に「太中大夫・門下侍郎を謝する表　二首」（『欒城後集』巻一七）がある。9〇已飛一句　蘇轍が車を急がせて橋のたもとまで迎えに来ることをいう。青蓋は車の青いほろ。劉公幹「公讌の詩」（『文選』巻二〇）に、「輦車は素蓋を飛ばし、従者は路傍に盈つ」とある。蘇軾も「岐亭　五首」の叙（『合注』巻二三）に、「岐亭の北二十五里の山上に至って、白馬青蓋にして来たり迎える者有り、則ち余が故人陳慥季常なり」と記している。「王復秀才の居する所の双檜　二首」の注（『蘇東坡詩集』第二冊四五二頁）も参照。10〇黄封　黄色の紙や絹で封をしたかめ酒。蘇軾は「岐亭　五首」その三（『合注』巻二三）でも、「我が為に黄封を取って、親ら官泥の赤きを拆く」

三〇

と詠じているが、その施注に、「京師の官法に、酒の黄紙或いは黄羅絹を以て餅口を封し冪うを黄封酒と名づく」とある。○賜茗　皇帝より賜った名茶。蘇軾は「前韻を用いて西掖の諸公の和せらるるに答う」詩（『合注』巻二七）に、「上尊は日日に黄封を瀉ぎ、賜茗は時時に小鳳を開く」と詠じている。12○一味　もっぱら、ひたすらの意。蘇轍「李簡夫が病に因りて出でざるに次韻す」詩（『欒城集』巻三）に、「十五年来　一味閑なり、近来　病を推して更に安眠す」とある。○淮潁　淮は揚州、潁は潁州。いずれも蘇軾が兵部尚書として召し還される前の任地。

老いの身をくたびれた馬にまかせつつずっと続く汴水の堤に沿って来て、楡や槐の影を飽きるほど踏みました。月に鳴く鶏に驚いて目を覚ますとまだ真夜中にもなっておらず、故郷に帰る夢を見たのはほんのひとときのことでした。

野にあって余生を送ろうにも残された時間がなくなった今、いずれとも知らぬ溝にこの身を埋める前にまた天子にお目見えすることとはなりました。侍郎どのは殿中での奏上を終えて、勅許を得てわたしを迎えにとりあえず役所をお出になったことでしょう。

今ごろは青い蓋の車を急がせて橋のあたりまで来られて、恩賜の酒や茶でねぎらってやろうと待ち構えておられましょう。はるばる長旅をしてきたわたしにはこれという贈り物はありませんが、ただ揚州も潁州も豊作だということだけは申し上げることにしましょう。

（担当　中　裕史）

一九〇五（施三二―三一）

次韻定國見寄

定国が寄せらるるに次韻す

1 還朝如夢中　朝に還りて夢中の如く
2 雙闕眩金碧　双闕　金碧に眩し
3 復穿鴛鷺行　復た鴛鷺の行を穿ち
4 強寄麋鹿跡　強いて麋鹿の跡を寄す
5 勞生苦晝短　労生　昼の短きに苦しみ
6 展轉不能夕　展転として夕する能わず
7 默坐數更鼓　黙坐して更鼓を数え
8 流水夜自逆　流水　夜自ら逆す
9 故人爲我謀　故人　我が為に謀る
10 此志何由畢　此の志　何に由ってか畢えん
11 越吟知聽否　越吟　知んぬ　聽くや否や
12 誰念病莊鳥*　誰か病荘鳥を念わん

〔原注〕時方請越（時に方に越を請う）

○元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。時に京師の開封（河南省）にあった。
○定国　王鞏のこと。定国は、その字。蘇軾「顔復を送り、兼ねて王鞏に寄す」詩（『蘇東坡詩集』第四冊二七九頁）の詩題の注を参照。1○還朝　朝廷に呼び戻されること。蘇軾が、兵部尚書として京師に召還されたことをいう。本注解に引く作品番号一八九八の詩の注を参照。2○双闕　宮殿や祠廟などの門の上に並ぶ楼。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八三の詩の注を参照。3○復穿一句　鴛鷺は、鴛鴦と鷺。ともに鳳凰の一種で、朝廷の高官たちを謂う。鴛鷺行は、高官たちの列。杜甫「暮春　瀼西の新たに賃せる草屋に題す　五首」その五（『杜詩詳注』巻

三一

一八）に「息まず豺狼の闘い、空しく慚ず鴛鷺の行」とある。一句は、京師に戻った蘇軾が再び朝廷の高官たちの列に入り込んでいくことを述べている。4○強寄一句　寄は、仮に身を寄せること。麋鹿は、山中に棲む鹿。在野の自由人を謂う。蘇軾は、しばしばその詩において、自らを麋鹿に擬える。蘇軾「孔文仲推官の贈らるるに次韻す」詩（『蘇東坡詩集』第二冊三七一頁）の注を参照。5○労生　生きづらい人生を喘ぎ喘ぎ生きること。労は、苦しみつかれる。蘇軾「除夜の病中、段屯田に贈る」詩（『蘇東坡詩集』第三冊四三一頁）の注を参照。○苦昼短　昼が短く夜が長いことに悩む。「古詩十九首」その一五（『文選』巻二九）「昼は短く夜の長きに苦しむ、何ぞ燭を秉りて遊ばざる」とある。6○展転一句　一句は、夜、眠れずに寝返りを打ってばかりいるさまを述べる。魏・文帝「雑詩二首」その一（『文選』巻二九）「展転として寐ぬる能わず、衣を披て起ちて彷徨す」。7○黙坐　静座して黙想すること。蘇軾「潁州にして初めて子由に別る二首」その一（『蘇東坡詩集』第二冊一〇六頁）の注を参照。○更鼓　夜中に時刻を知らせる太鼓。更は、夜の時刻を計る単位。古くは夜の時刻を初更から五更まで五つに分かち、数えた（『顔氏家訓』書証篇）。8○流水一句　一句は、前の7句を承けて、夜間に黙坐するうちに、頭頂から足先まで、気が体内を隈なく循環することを述べる。『四河入海』巻一九の三に引く一韓智翃の聞書に「言（フココロ）ハ、道家ノ養生法ニ古キ気ヲ吐キ新気ヲ納（レ）テ吐納ヲ学（ブ）ゾ」とあり、また「逆ト云（フ）ハ、身中ノ血ガ一日一夜ノ中ニ足下ヨリ頭頂マデクルリクルリト三百六十度スルゾ」とある。9 10○故人・此志二句　故人は、古なじみの友。王鞏を指す。二句は、王鞏が蘇軾の身の上についてあれこれ心を砕いてくれているが、蘇軾は、平生の済世の志を遂げるのは到底難しそうだと述べている。具体的なことは明かされないが、蘇軾と王鞏の間では了解可能な事柄であったのだろう。瑞渓周鳳の説に「此レ以下ノ二句、言フココロハ定国ガ来詩、必ズ我レ宜シク朝ニ在リ時ヲ済フベキコトヲ説ク。然レドモ仕宦ハ歇期有ル可カラザル則ンバ早ク引（キ）去（ラ）ンニハ如（カ）ジ」とある。11 12○越吟・誰念二句　二句は、『史記』陳軫伝に見える荘舄の寓話を踏まえる。荘舄は、越の人で、楚に仕えて高官になったが、病を得た。荘舄が故郷の越のことを思っているのではないかと懸念した楚王が、「彼　越を思えば則ち越声ならん、越を思わざれば則ち楚声ならん」と言う侍者の説に従って、人を遣って確かめさせたところ、荘舄は越の言葉でしゃべっていた、という。

越吟は、越のうたを口ずさむ。魏の王粲「登楼の賦」（『文選』巻一一）に「鍾儀は幽われて楚奏し、莊舄は顕れて越吟す」とある。〔原注〕に見えるように、この時、蘇軾は、越に赴任することを朝廷に願い出たが、許されなかった。二句は、故郷を思って越吟した莊舄に、越への赴任を願って果たせず、京師での宮仕えが続く蘇軾自身を喩えている。一韓智翃の聞書に「莊舄ヲ以テ坡自（ラ）比スゾ。又ハ我ガ蜀ヲ思（フ）ノ心アルヲバ、御知（ルコト）アルカト云（フ）心モヨイ歟ゾ。然レドモ越（ヲ）乞（フ）ハ、公ノ自注ナレバ、越（ヲ）思（フ）ノ義ガヨイ歟ゾ」とある。〔原注〕○時方請越　『続資治通鑑長編』巻四七八に「元祐七年十一月癸卯、兵部尚書蘇軾　越州を乞う、允さず」とある。

朝廷へ呼び戻されたのは夢のよう、宮城の（あざやかな）金色と瑠璃色に目がくらみます。またもや、お歴々の居並ぶ中に割り込むことになりましたが、山林に棲む鹿のようなこの身を無理して預けているのです。

苦労の多い人生で、昼は時間が短いのが恨めしく、夜は夜で思い悩んで寝返りばかり打って眠れないのです。

黙然と坐したままで太鼓が時を告げるのを数えていると、体内の脈流が夜の間に蘇ります。

永年の友であるあなたは 私の身の上をあれこれ案じてくださいますが、この済世の志をどうしたら実現できましょうか。越を思う私のうた声が あなたには聞こえるでしょうか、この病莊舄の胸中を誰が思いやってくれましょう。

（担当　原田直枝）

三三